

本当の東京最後の秘境——白金

寒い日が三日ぐらい続いたあと、比較的暖かな日が四日ぐらい続く。そんな「三寒四温」を繰り返しながら、一步一步、春が近づいている。日に日に夜明けの時間は早くなり、朝の陽の光は勢いを増す。政府が言う景気回復の胎動はなかなか感じられないが、春は間違いなく胎動している。改めて自然は凄いとしみじみ思う今日この頃である。

そんなことを感じさせる冬の早朝の陽の光が射し込んでくる白金のマンションに移ってきて、そろそろ八ヶ月になる。月日の経つのは速い。もといいた元麻布のマンションは、それはとても都心とは思えない閑静なところにあつた。それでいて便利だった。坂道を下って五、六分も歩けば、ほとんど何でも間に合う麻布十番の商店街に出た。

しかし、日当たりが悪いのが致命傷だった。他の住人は外人ばかりで、あまり日当たりなど気にしていないようだった。でも、こちらはそうは行かない。とくに冬場は最悪だった。日の出・日の入りに逆らわない生活を心がけるようになってい身には堪えた。ふた冬が過ぎたところで、ついに転居を決意した。

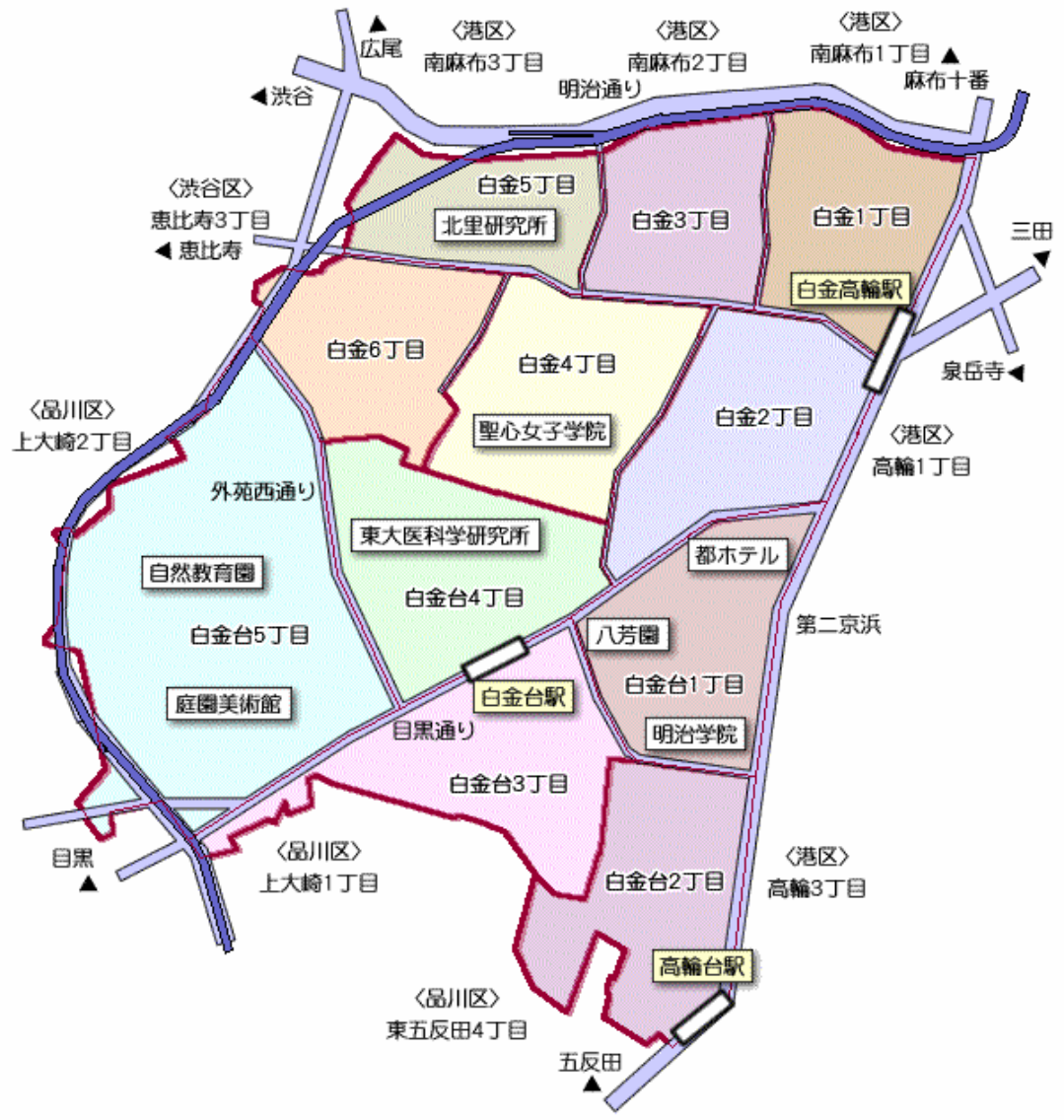
「良い物件がありました」

日当たりが良くて、こざっぱりしていて、駐車場が付いている。家賃は手頃で、しかもオフィスに近いところ——「条件は全部満たしています」そう言つて馴染の不動産屋が得意そうに紹介したマンションに移った。

白金——古くは銀、白銀とも書いた。

「白金長者」とよばれた豪族、柳下上総之介の一族が南北朝時代から代々、この地

に住んでいたのが地名の由来だという。長者の館は高台たかだいにあり、その一帯は「白金台」と呼ばれた。それが江戸時代に高松藩主・松平氏の下屋敷となり、一九一七年（大正六）に皇室の料地となったあと、一九四九年（昭和二十四）には自然教育園（面積約二十万平方メートル）として開放された。付近には、東京大学医学研究所、聖心女子学院、明治学院大学などがある。



「また高級なところに移ったな——」

白金に転居したと聞くと、こう言う友人が多いが、とんでもない。イタメシやイタリア・ファッションで有名な「プラチナ通り」などの高級イメージで売っている

のは「白金台」である。地図でいうと、「プラチナ通り」というのは、目黒通りへ抜ける外苑西通りである。「白金」ではない。

「白金」、それも地図で示すと、横に走る恵比須から地下鉄「白金高輪駅」を結ぶ通りの上側、白金一丁目、三丁目、五丁目はタイムマシンで昭和三十年頃の東京に戻ったようなところである。そんなところも気に入って移ったのだけれど、住んでみて改めて、麻布十番を「東京最後の秘境」と呼んだのは、マスコミの宣伝に乗せられたに違いないと恥ずかしくなった。

坂の上と下の棲み分け

「東京地名考」（朝日新聞社会部編 朝日新聞社 一九八六年）では、白金の一带は次のように紹介されていた。十年以上も前の古い記述だけれど、今でも通用する。ところどころにバブルの爪痕つめあとが目立つ程度で、街の構造は基本的に変わってはいない。

街は二つの顔を持っている。高台は、ちよいとした長者でないと住めない邸宅の多い高級住宅地。緑豊かな広い構地を持つ聖心女子学院（高・中・初等科など）は明治四十一年、オーストラリアから来日したマザー・ヘイドンら聖心会修道女が設立した語学校に始まる。

一方、明治通り寄りの地域は町工場、銭湯、公益質屋などもあり、庶民的な雰囲気だ。天下の御意見番・大久保彦左衛門の眠る立行寺もある。そして北里研究所、北里大学。ペスト菌の発見、破傷風菌の純粹培養法など前人未到の業績をなし遂げた北里柴三郎（一八五二〜一九三一）は苦学・晩学・超人的努力の人。烈々たる愛国者。「奮闘は由来、吾が期する所」

「一六歳の初陣以来……」の彦左衛門は少し格が落ちるようでもあるが、いつの世にも硬骨漢は希少価値がある。まあ、プラチナといってよかろう。

ここでいう「高台」の地域が、だいたい今の「白金台」に相当する。白金台一丁目とか二丁目などの住所のところである。明治通り寄りの「町工場、銭湯、公益質屋などもあり、庶民的な雰囲気だ」という地域が、今の白金一丁目、三丁目、五丁

目あたりである。この対照的な地域の境が高台の麓を走る道路——地図でいうと白金高輪駅から恵比寿へ抜ける、都バスが頻繁に走る通りである。町工場や低い家並みを背に、この道路に面する南側のベランダに立つと、緑深い高級住宅がいくつも目の前に大きく迫ってくる。向こうからは見下されているのだろうけれど、実に微妙なところに、まさに高台と低地との境に、今いるマンションは建っている。

「高さは眺望を支配する。高見から見下ろすのは実に気分がいいものだ。しかも高さというものは優越感をも刺激するものらしい。……江戸時代の坂からの眺望とヒエラルキーは比例した。坂の空間は、はつきりとした棲み分けが行われていた。……坂の上から大名の下屋敷・中屋敷や寺社が置かれ、坂の下には町人地、坂の中段は下級武士の住居が占めた。……坂の上と下の棲み分けは、見下ろすことと見上げること、つまり土地の高低が身分の高低に反映したといえるだろう」

（「坂の迷宮」志賀洋子 日本経済新聞社 一九九七年）

この「棲み分け」が白金では今でもハッキリと続いている。その中で僕は下級武士に割り当てられた一帯に安息の地を見出したらしい。今は身分の高低ではなく金持ちか否かが「棲み分け」の基準だが、それにしても出来過ぎである。

もつとも、何と言われようと、僕にすれば、バス停のすぐ近くだし、なんだかんだと理由をつけては集まっては一杯やる作家の杉田望と、大学で四年間も一緒に、それからというものの腐れ縁としか言いようのない浅井隆士の二人の住まいの中間に位置し、便利なことこの上ない。それに両親や祖先の墓、その血の一部が僕にも流れているらしい歌舞伎などで有名な江戸町火消し新門辰五郎の墓もある高輪の菩提寺にも歩いていける所であったのは因縁としか言いようがない。

一年の節目々には昔ながらの盆踊りの太鼓や祭りの囃しの音がどこからともなく流れてくる。近くの神社の境内では縁日が開かれる。麻布のように、それを目当てに来る観光客で溢れることもない。昔ながらの情緒が温存されている。寂れていると言われると、そうかも知れないとも思うけれど、僕は気に入っている。

商店街の通りも車がすれ違うのがやつとで、そこから洗濯物や植木鉢が賑やかな細い横道に入った途端に、かくれんぼや缶けりなどに明け暮れた子供時代に戻ってしまう。そんなタイムトンネルの入口があちらこちらに隠れている、胸がときめくところが、今いる「白金」である。

松飾りと寒椿

きわめつけは正月だ。狭い道路に面した家々の玄関には申し合わせたように松飾り——門松が飾られていた。それも丈が一メートルにも満たない小さな松一本を基にしたものである。「生活改善運動」の申し子のような松の絵が印刷された紙など見当たらない。あくまでも昔ながらのものである。高台の「白金台」では見られない、明治通りと高台に挟まれた地域——「白金」だけに見られる光景である。門松は「白金」の名物なのかも知れない。

「門松」は白金から見て「明治通り」の反対側の「麻布」にも見られない。そもそも「明治通り」は「白金台」と「麻布」という二つの高台の谷間を走っており、「明治通り」を挟んで反対側にはあるものの、高台に位置するという共通点を持つ「麻布」と「白金台」とは似たところが多い。簡単に言えば、高級住宅街というイメージである。この「麻布」と「白金台」に挟まれた谷間という地理的条件もあって、「白金」は時代の流れから取り残されたように見える。



その白金では何故だか分からないけれど、寒椿が目に付く。椿ではない。椿はその字の通り春に花を付けるけれど、寒椿は十一月下旬から翌年の二月にかけて花を咲かせる。麻布にいたところはほとんど目にしなかったが、白金ではあちらこちらで寒椿を見かける。通りの少ない路地を肩をすくめて急ぎ足で歩いていると、黄昏の中に真紅の花が忽然と姿を現す。沈丁花みたいに香りの予兆がないだけに、心が乱される。

見ていると、ぽたりと赤い奴が水の上に落ちた。……しばらくすると又ぽたりと落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつた儘枝を離れる。離れるときは一度に離れるから、未練のない様に見えるが、落ちててもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。又ぽたりと落ちる。……

だから夏目漱石の「草枕」の一節が浮かんできてしまう。

やっぱり「何となく毒々しい」のだろうか。寒椿でも椿でも、その花を見てウキウキする気分にはなれない。それに対して、同じ時期に花を咲かせる満作、梅、連翹、木瓜、木蓮などを見つけた時には、嬉しくなって思わず声を上げてしまう。家に戻り買ったばかりの「草木花 歳時記 春」（朝日新聞社一九九九年）を開いたら、次のような句が載っていた。

椿踏む道や寂寞たるあらし （支考）

古井戸のくらきに落つる椿かな （蕪村）

落椿投げて暖炉の火の上に （高濱虚子）

戸の明けて椿の見ゆる掃除かな （北枝）

流れゆく椿を風の押しとどむ （松本たかし）

藪椿いさかひもまた絆かな （穴井 太）

落椿われらば急流へ落つ （鷹羽狩行）

なんとなく考え込んでしまう句ばかりである。椿は常緑樹で、緑少ない冬季の貴重な庭木には違いないが、どうも好きにはなれない。「姉子、椿……」の曲が流れてくると、椿油——日本髪——頃といったことと同時に、伊豆大島——源為朝などが島流しになった流刑地などと連想してしまう。

七草ナズナ、唐土の鳥が……

常緑性の草木には呪力や霊力があると信じられている。それならそれで「緑」だけで我慢すればよいのに、一際目立つように冬に華麗な花を咲かせる。そんなと

ころが僕が椿を好きになれないことに関係しているのかも知れない。その点、同じ常緑性の草木でも鏡餅に添そえられる裏白うらじろとか譲葉ゆずりはなどには清々しさを覚えてしまう。

ウラジロ（裏白）——常緑性の大形のシダ。日本の東北地方南部が北限で、南はフィリピンまで分布。葉の表面は艶つやのある緑色だが、裏面は白色を帯びていることから、この名前がついたという。一般にシダと言うと、ウラジロをさす。羽状の複葉の各片が垂たれる——長ながく垂たれる——ことを「歯垂しだる」、「齡垂しだる」にかけ、長寿の意味を持たせ、正月を祝う注連飾しめかざりなどに使われる。

ユズリハ（譲葉）——常緑高木。高さ十メートルに達する。葉は長楕円形で長さ二十センチ前後。葉の表面は革質で光沢がある。中部地方以西の本州から九州、中国に分布。庭木として広くも植えられている。若葉が生じてから古葉が落ち、新旧の葉の交代が目立つことから、この名前がついたという。新旧交代の意味を持たせ、新年や祝事いわいごとの飾り物として用いられる。

こんなことを植物図鑑や百科事典で知った時でも、ただただ素直いにしえに古の人たちの自然を観察する鋭い眼と豊かな想像力に感心したことを覚えている。

余談だが、このウラジロとユズリハを国会議事堂の周囲にびっしりと植え込んだらどうだろう。御利益ごりやくあつて、長老を敬うやまいつつ新旧交代が円滑に行われ、日本の国の変革も進展するかも知れない。「ウラジロ・ユズリハ革命起こる！あまりにも突然で関係者も当惑」そんな見出しが新聞の一面を飾る。ウラジロとユズリハを手に集まる群衆と、それを排除しようとする機動隊。想像しただけでもなかなか痛快ではないだろうか。

「何でこんなことをするの？」

いろいろ聞き回つては、正月の支度したくで慌あわただしい両親わすらを煩わづらわせたのは、つい昨日

のことだったように思い出す。その僕が、気が付くと、やつぱり正月には松飾りや鏡餅は欠かせないと呟き、年末になると、親父がやっていたように、必死で格好のいいウラジロやユズリハを探すようになっていた。あろうと、なかりうと、どうでもいいじゃないか——そう思う一方、ともかく、昔から良いと言われることなら、それはそれで突つ張らずにやってもいいじゃないか。そこで妙に頑張る必要もあるまい、と普通に思うようになっていた。

当然のことながら七草粥も欠かせない。一月七日の朝、無病息災を願って、粥に春の七草——芹、薺（油菜）、御行（母子草）、はこべら（繁縷）、仏座（キク科）、鈴菜（蕪）、清白（大根）——を入れて食べる行事である。その昔、中国から伝わった風習だそうだが、由来などどうでも良い。もう、すっかり僕の体には染み込んでいる。

「さあ、明日は七草粥だよ！」
子供の頃は、そう急かされて、よく七草を摘みに行った。セリ、ハハコグサ、ハコベ、ホトケノザ。こんなのは雑草で、近くの空き地などにいくらでも生えていた。どこに行けば、何が採れるかなどは頭の中に入っていた。それに大根や蕪などを加えれば、簡単に七草粥ができた。「今年の七草は立派だね！」などと言われると、得意になって、旨いとは思わなかったけれど、つついとお代わりをしてしまったものである。



時代はすっかり変わってしまった。今では七草を摘むのも都会では容易なことではない。無理を承知で、今年の七草には、探しに出てみた。少しでも自分で摘んだものを混ぜて七草粥を作ろうと思ったからだ。表通りを離れ、路地を歩き回って、やつとハコベとハハコグサだけは見つけた。でも、柵越しの庭の中にあつて、ちよ

つと「失敬」と摘む訳にはいかなかった。結局、スーパーに寄って「七草パック」を買う羽目になった。

「七草ナズナ、唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に……」と、豊作を祈る鳥追いの唄を口ずさみながら、トントントンと調子を付けて包丁で七草を細かく刻み、熱々の粥に入れる。それを、緑の鮮やかさが褪せないうちに、フウフウ言いながら食べるのは格別である。

子供の頃は、決して旨いとは思わなかったが、嗜好が変わったのだろう。今は妙に旨い。野草の匂いや苦みが厭だったが、逆に、今はこたえられない。丁度、雑煮や御節料理などに癖壁してくる頃なので、最高である。嬉々として、お代わりするようになっている。今年も、朝食も昼食も七草粥だった。

桃の節供と雛人形

七草粥が終わると鏡開きである。松飾りは片付けられ、あつという間に街は普段の姿に戻る。印刷所は動き出し、炒り豆屋の親父は店先で大きな竹製のザルに袋から豆を移し、丹念に選りすぐって豆を炒りだす。飽きもせず朝から晩までやっている。そんな様子に気を奪われていると、もう桃の節句である。

つい先日、八千草薫に似た女将がやっている近所の馴染の焼鳥屋のトイレに入ったら、桃の花と博多人形の内裏雛が飾ってあった。いつものように浅井隆士の悲憤慷慨が酒の肴で、それで酩酊してしまったこともあるのだろう。ヤケに心に浸みた。内裏雛をキーワードに別世界に紛れ込んでしまった。

そんなこともあって、僕はもう戸を開け外に出ているのに、浅井は、まだ、いつものように女将を相手にしている。本人はからかっているのだと説明するけれど、横から見ていると説教しているとしかい思えない。こうした場面は浅井の独壇場で

ある。そういう時には口を挟まないことに決めている。もつとも杉田望は耐えられないらしく、突然、「あの女将は俺のことを嫌っている」といった子供みたいなことを口にする。だからだろう、最近、この店で逢おうと言うと杉田は露骨にすねる。それで、ここで会うのは浅井と二人のことが多い。この時もそうだった。

節供——節句とも書く。年間の折り目、節目となる年中行事。御節料理という言葉は、その名残り。日本各地にいろいろの節供があったが、江戸幕府が徳川氏の出身地三河の習慣を取り入れて五節供——正月七日の人日、三月三日の上巳、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重阳——を定めたことから、これが広まった。それが、今の「七草」、「桃の節供」、「菖蒲の節供」、菊の「七夕」、そして「菊の節句」の起源だという。

そして女の子が生まれたら雛人形を贈るなどの風習が確立し、今のような形の桃の節供——雛祭が一般化したのは、わずか明治以降のことだという。商店が雛人形の売り出しに拍車をかけたからだという。それ以前は、「節句」の意味も、やり方も、地域によってバラバラだったという。

小学生の時、女友達の家に招待された。桃の節句を過ぎていたけれど、まだ雛人形が飾られていた。男だけの家族だったので珍しく、それらを使って、一緒に飯事をしていたら、「いつまでも雛人形を片付けないと、お嫁さんに行けなくなりますよ」と女達はお婆さんに怒られた。僕は訳が分からず驚いた記憶が鮮明に残っている。

しかし、どう調べても、娘の婚姻と雛祭りの飾り付け期間との関係に、何らかの関係が存在するとは思えない。そんな実証デーも見たことがない。多分、「土用の鰻」のような話と大差ないように思う。いま流行の二月十四日のバレンタイン・デーと同じである。雛祭りは廃れてきているけれど、「義理チョコ」は依然として威

力を発揮している。やらないよりはやった方がいいだろうという打算もあって、チョコレートを配るのが独身女性の責務のようになってきている。

その目的も「円滑な人間関係」の維持といったことが中心で、それが直ちに婚姻とに繋がるなどとは誰も思っていないだろう。事実、回りも見ても、雛人形ひなにんぎょうを出しっぱなしにしていた女友達も、とうの昔に結婚している。幸せかどうかは別にしてだ。だいたい、きちんと片づけていたにもかかわらず、ついに一生、独身ですぐすことになりそうな女性が僕の周りにはたくさんいる。小学校の同級生だけをとってみても、独身者の比率は二割ちかくなっている。

そう言えば、白金にいと、バレンタイン・デーというものがあつたことすら忘れてしまう。どこからも、そんな雰囲気は漂ってこないからだ。今年も「高島屋に行ったらバレンタインのチョコレートを買う人でいっぱいだった」。そんな話を小耳に挟はさんだけれど、チョコレートとは無縁であつた。もちろん、万が一にももらつたとしても、食べることもない僕にとっては、本当にまったく無意味になると思うのだけれど……………。

一九九九年春 伴 勇貴

「白金マップ」 http://www.whi.nc.jp/~kawakami/shiro/shiro_m.html

「春の七草」 <http://www.inetq.or.jp/green/yyyy/haru7.html>

にあつた写真や地図を使わせてものを使わせて頂いた。